

令和 8 年度八尾市産業振興会議 第 2 回本体会議 議事録

日 時	令和 8 年 9 月 28 日（月） 15 時～17 時
場 所	八尾商工会議所会館 3 階 セミナールーム・多目的室
出席者	＜委員＞ 山縣座長（オンライン参加）、木下副座長、今岡委員、奥田委員、樫本委員、北本委員、佐藤委員、徳丸委員、友安委員、星野委員、松井委員、美馬委員、三宅委員 ＜事務局＞ 岩井部長、浅井次長、後藤次長、亀村課長、棕本課長補佐、稲森係長、穂満係長、嶽山、運営支援事業者 出村氏、外崎氏、森崎氏

－事務局による司会で次第に沿って進行－

1. 開 会

事務局より、乾委員、岡田委員、杉山委員、寺西委員、中村委員、柳川委員の欠席を報告。併せて、全委員 19 名のうち 13 名の委員の出席となっており、八尾市産業振興会議規則第 3 条に規定する過半数の委員の出席により、本日の会議が成立していることを報告。

魅力創造部長あいさつ

2. チェックイン

事務局より、チェックインの方法について説明。

3. 第 1 回の振り返り

事務局より資料に沿って説明。

4. グループワーク

－事務局による進行－

ワークの進め方

事務局より、グループワークについて説明。八尾市産業振興会議では 10 年前にも「どうしたいか」をしっかりと話し合ったことが今につながっており、そのプロセスを大切にしたいとの説明があった。

前半：ご自身の分野（経営者、従業員、支える立場など）から見て、周囲の方と一緒に 10 年後どうなりそうか、どうなっていてほしいかを、ご自身とその周りを思い浮かべながら話す。

後半：先が読めない時代に、不安なこと・起きそうなこと・備えたいことについて話す。切り口として、「A I ・デジタル」「人口減少・人手不足」「物価・原材料の高騰」「気候変動・災害（B C P）」「為替・関税」などを提示。あわせて、個人ワークで、付箋の色を目安に、「暮らす人」「働く人」「事業を営む人」「支える人」の立場から、不安なこと・備えておきたいことを書き出し、模造紙に貼り出してから議論を深めることとした。

グループワーク 1（今岡委員、奥田委員、北本委員）

委員：紙需要の減少や人手不足を見据え、既存事業に加えて、建物や看板等を壊さずに洗浄・再生する「再生洗浄」など、新たな分野への展開を進めている。今後 10 年で事業の軸は大きく変わると考え

ている。

委員：A I で業務が効率化される一方、A I だけでは地域の実情や事業者の思いを捉えきれない。生まれた時間を事業者や大学とのリアルな対話に使い、地域のニーズに合った事業と一緒に考えることが、今後の行政に求められる。

委員：A I が結果をすぐに出せる時代だからこそ、対話を重ねて意見を集める「過程」に価値がある。デジタル化が進んでも、職人技や現場の仕事、リアルなコミュニケーションの価値は高まるのではないか。

委員：人口減少を過度に悲観するのではなく、長期的な視点で捉えることも必要。未来を正確に予測するより、災害などの変化に柔軟に対応できる仕組みを整えることが重要である。

委員：事業者同士をつなぐ「接着剤」のような役割を行政に担ってほしい。災害時にも同業者が協力できるネットワークや連携協定を整えておくことが重要である。

委員：中小企業は暮らしを支える働く場であり、企業を通じて産業を知る機会を増やすことが重要である。

委員：B C P や材料価格の高騰などへの備えが必要であり、行政と事業者が立場を超えて一緒に考えることが重要である。

委員：人が熱中するには、危機感や存在意義、好きなこととの出会いなどがきっかけとなる。コロナ禍には新商品を自ら作って販売するなど、危機をきっかけに新たな仕事を生み出した。

グループワーク 2（樫本委員、友安委員、星野委員、美馬委員）

委員：飲食業では「楽しむ店」と「食事を済ませる店」に二極化し、前者は高付加価値化、後者は機械化・無人化が進むのではないか。製造業でも、自社商品の販売やネット通販への対応が進むと考えている。

委員：A I の発達でサービス開発が容易になり競争が激しくなる一方、自宅や飲食店とは異なる、人と交流できる場へのニーズは残る。まちづくりも行政や企業だけでなく、市民を含む多様な主体の協力が必要になる。

委員：メディアでは記事より動画が重視されるなど、情報の受け取られ方が変化している。A I 時代には情報の信頼性や「誰が発信するか」がより重要になり、顧客対応などでは人にしかできないコミュニケーションも残る。

委員：住宅は新築から中古・リノベーションへ需要が移り、空き家の活用が重要になる。建築・不動産では人手不足やA I による情報検索が進む一方、高額で複雑な取引や施工では人の関わりが必要であり、地域性や企業の個性も重要になる。

委員：A I が発達するほど、人のあたたかさやコミュニケーションの価値が高まる。企業においても、A I だけではなく、人とのつながりや「誰が言うか」が重要になる。

委員：教育では、地域や企業と学校の連携、外部人材の活用、探究学習などが進むのではないか。一方、教員不足や地域の担い手不足、P T A 等の高齢化などが課題であり、学校だけで抱え込まず地域と連携する必要がある。

委員：高齢化により、地域活動の担い手不足や認知症、買い物・通院などの移動手段が課題となる。

公共交通や商店の縮小も進む中、高齢者がデジタル化から取り残されないための支援も必要である。

委員：自動運転やＡＩなどの新しい技術は、実際の高齢者のニーズに合わなければ十分に活用されない可能性がある。技術導入だけでなく、利用者の立場から考えることが重要である。

委員：物価・為替の変動、災害、気候変動、高齢化などへの不安がある。ＢＣＰなどの備えに加え、介護や人生の最期についても社会全体で考える必要がある。

委員：１０年後だけでなく、さらに長い時間軸で地域や社会を考えることも重要である。学校区や地域のつながり、文化など、将来に残したいものを意識していく必要がある。

グループワーク３（佐藤委員、徳丸委員、松井委員、三宅委員）

委員：高齢者は今後も増加し、介護などのエッセンシャルワークの担い手不足が深刻になる。一方、フィジカルＡＩやロボットの進化により、介護や人手不足を補う可能性があり、今後５～１０年での設備投資や制度整備が必要になる。

委員：ＡＩやロボットの普及により、製造業や一次産業などでは人が担う仕事が減り、一般的な製品は価格競争が難しくなる。今後は、匠の技や地域性、八尾ならではの製品、人の感情やつながりに関わる価値が重要になる。

委員：ＡＩが発達しても、人に寄り添う仕事や人間同士のコミュニケーションには価値が残る。ＡＩに任せる仕事と人が担う仕事を考え、人間らしさや地域のつながりを大切にする必要がある。

委員：教育について、ＡＩが人間の学力を上回る中、従来の知識・点数中心の教育だけでよいのかを問い直す必要がある。人間性や経験、主体性を育てる教育や、地域・企業と連携した学びが重要になる。

委員：ＡＩやＶＲなどが生活を便利にする一方、人が考えなくなったり、依存したりすることで主体性や人とのつながりが失われることへの不安がある。ＡＩを使いこなすだけでなく、人が人を大切にすることが重要である。

委員：物価高・円安、ＡＩを悪用した犯罪、一人暮らしの増加、地域のつながりの希薄化、農業の担い手不足などが不安となる。行政や大学、地域など、多様な主体が連携して対応する必要がある。

委員：食料や災害への備えとして、地域で必要なものを確保する仕組みや、自給・防災への取組も重要である。ロボットに任せたい仕事がある一方、誤作動などへの備えも必要である。

委員：将来に向けて、あえて「不便」や「非ＡＩ」に価値を見だし、人とのつながりや昔ながらの暮らしを残すことが重要である。町内会の加入率を高めることや、井戸や温泉を活用することなど、地域独自の魅力をつくることも考えられる。

委員：ＡＩや便利さに疲れた人が、人とのつながりや不便さを求めて集まる「人間らしい街」を目指してはどうか。

全体共有として、各グループから、議論の内容について発表があった

＜グループ１＞

委員：ＡＩにより定型業務の効率化が進む一方、ＡＩが作成した文章の確認に時間がかかっている現状がある。ＡＩが出したアイデアではなく、事業者やステークホルダーとリアルな場で一緒に同じものを見て新しいことを構想していく姿勢が求められ、自治体は「接着剤」の役割を果たす必要があ

る。

委員： 災害・気候変動について、ハザードマップ上、洪水時には市内の約半分が浸水するとされる中、事業者同士のネットワークを平時からつくっておくこと、有事に先導して引っ張る「ブルドーザーのような人」を育てること、そのネットワークの適切な距離感や規模感を考えることが必要である。

委員： コロナ禍では、新しい業態への挑戦や、従業員が垣根を越えて取り組んだことで、つながりが強まった例もあり、ピンチの経験は会社にとっても個人にとっても大切である。

委員： AIに何でも考えてもらおうと、人間が深く考えなくなる。人手が減る中で、現業の職人技の価値は高まり、給与も上がって、若者が憧れる職業になり得る。既存の製造業や建築関係は、10年後に良い時代を迎えるかもしれない。人を本気にさせる、熱中できるものを見出すことも我々の役割である。

<グループ2>

委員： これまで産業は発展させなければならないという前提で話されてきたが、AIが進展する中で、産業の発展が本当に幸せなのかという問いが出た。どの仕事も今後は差が出にくくなるため、むしろ人間らしい感情が日本で一番あふれる「情緒爆発の街」を目指してはどうか。

委員： AIに追随するのではなく、人間が主体的な価値を獲得するために何をすべきかを議論した。産業革命以降、人間が主役として道具を発展させてきたが、初めて主役を奪われそうな状況の中で、どう生きかが論じられた。国道25号線を壁にする、井戸を掘る、子どもにサバイバル術を教える、通常教育から離脱する、鎖国といった極端なアイデアや、「非AI都市」を掲げる案も出た。

委員： 八尾は産業を追うのではなく、「生き方を問う（追う）街」として提言してはどうか。ものづくりの街という方向ではなく、教育や医療に尖りつつ、最終的に「逆戻りの価値（不便な便利）」を見直す方向を追求すれば、楽しくなるのではないか。逆戻りは難しいが、その難しさも含めて追求する価値がある。

<グループ3>

委員： 飲食、製造業、不動産、建築などの分野で、「最低限の暮らし」と「楽しむための暮らし」への二極化が進むのではないか。AIに頼るだけでなく、人と人とのコミュニケーションや人を育てることが大切であり、教育では地域・保護者・学校の連携が重要である。

委員： 約300年の周期（産業革命からAIの到来まで）で世の中が変わってきているという見方があり、より長期の視点も必要である。地域や学区はなくならないため、地域を大切にしていけることが重要ではないか。人生の終わり方（最期の迎え方）についても問題提起があった。桜など身近な文化が失われつつあることにも触れ、こうした地域を大切にしていけることが重要である。

委員： 300年・8世代先に何を残したいかを考えたうえで、10年後について考えると考えやすい。長い時間軸で見れば、10年後の不安は不安ではなく、対応可能なものになるのではないか。

事務局より、ギャラリーウォークとして各委員に赤いシールを配布し、検討部会のテーマにしたいと考えるものに貼付するよう依頼があった。貼付後、委員間で意見交換を行った。

座長総括

座長：約 300 年前は、大和川の付け替えにより現在の八尾の多くの地域が人の住める場所になり、河内木綿が生まれ始めた時期にあたる。「10 年後」を考えると同時に、「300 年のための 10 年」という捉え方をしてもよいのではないかな。

座長：3 つのテーブルの話聞いて、次の 3 点が具体的に議論できるテーマになり得ると考える。

- ①つながりの質 量ではなく質をどう豊かにするか。最期の迎え方の話も含め、高齢化の進行とともに切実になる。世代を超えたつながり、業界を超えた大人のつながりなど、つながりの質は新しい価値を生み出す際のポイントになる。
- ②「作る」ことの価値 AI が当然の時代になっても、ものを作ることは AI にはできない。作るものの価値をどう高め、認めてもらうか。産業振興会議の中心的なテーマになる。人と物は切り離せない（人が使うものである）という視点も含める。
- ③知識と知恵とリアリティの結びつけ 科目の境界を超えた、サバイバルなどの実践的な知恵の重要性。経営者が学校で話す、生徒・学生が現場に行くなど、現場と教育の総合横断的な取組を増やすことは、新しいアイデアの創出にもつながる。

座長：これらの土台として、「ほんまもん」（真正性、authenticity）と、情熱・本気で取り組む姿勢をコアバリューとして置き、それが①～③全体に及ぶ形で、具体的な方法が見えてくるのではないかな。あくまで現段階の仮の整理であり、今後変わり得るし、他に議論したいことがあれば自由に出していただきたい。

5. 検討部会への付託内容の共有・検討部会委員の選任

事務局より、検討部会は、本体会議からの付託を受けてテーマに沿った検討・審議を専門的に行い、本体会議に審議結果を報告する部会であると説明。座長の総括で示された内容を、付託内容の方向性として共有した。

検討部会は年 3 回程度開催する予定。検討部会委員は、八尾市産業振興会議規則に基づき座長が指名することとなっており、配付した検討部会委員一覧のとおり指名された。

今回は、第 1 回検討部会を令和 8 年 10 月 26 日（月）18 時 30 分から、本日と同じ会場で開催予定。

6. 閉 会

産業政策課長より、あいさつ。

<参考：当日のグラフィックレコーディング>





